

藤田富士夫

(埋蔵文化財センター所長)

はじめに

最近、中国で報告された攻玉遺跡を紹介する。これまで攻玉資料は断片的に知られていたが、今回、玉器が盛行する良渚文化の良好な攻玉資料が報告された。

※以下、紹介を旨とするので報告を意識し合わせて理解を助けるための補訳をした。日本の考古学用語に置換した部分(粗砂岩→粗砥)もあるが、意味が通じるものはそのままにした個所がある(例・「切割」、「線彫」、「解玉材」など)。仔細は、原文を参照していただきたい。

文献 南京博物院 2001 年「江蘇句容丁沙地遺跡第二次発掘簡報」『文物』第 540 期(文物出版社 2001 年 5 月号)

中国・丁沙地遺跡

丁沙地遺跡は、中国江蘇省句容市に所在する。1998 年 7～11 月に南京博物院考古研究所が行ったトレンチによる総面積約 350 m²の発掘調査で、第四文化層から土器 10 余点のほか大量の破片や攻玉資料(原石ほか)78 点、小型石器 261 点が出土した。特に、H 3 調査区の T0103 では、長さ 2.4m、幅 0.7m、深さ 0.6mの略長方形の土坑から、挟砂(砂混じり)紅陶鼎足、玉材、小型石器が出土した。この土坑は攻玉工房跡と見ることができる。共伴した陶器は良渚文化晩期に属する。T0103 区の土坑を中心とした攻玉資料は次の通りである。

攻玉資料

1、玉器 8 点 「玉錐形飾」の未製品が認められる。

2、玉材 70 点 原石が 12 点ある。残りの 58 点(註・以下の a～e の合計は 59 点となる。違いの理由は分からない)には擦切りなどの加工痕が認められる。白色や灰緑色などを呈する透閃石が主で、わずかに陽起石や輝石を含む。硬度は 5.5 以下である。玉材の詳細は次の通りである。

a. 管錐痕を有する玉材 11 点。管錐で抜かれた玉芯材で、片面穿孔と両面穿孔とがみられる。形状から①琮と觚類の錐芯、②璧と鉞類の錐芯、③柱形器類の錐芯、の三種類がある。

b. 薄片切割痕玉材(薄片による擦切痕を有する玉材) 17 点。薄片状の砂岩質の石鋸で、上下から施溝を加え、最後に打撃によって二分割する技法による。V字あるいはU字状の施溝痕を有する。いわゆる施溝分割技法をいう。

c. 線切割痕玉材(柔軟性をもった工具で媒材を用いて切割された玉材)10 点。切割面に弧状の凹線が残される。弧面にU字形の切口が見える。

d. 薄片切割技法+線切割痕玉材 5 点。線切割痕玉材の平面体に薄片切割による施溝が加えられる。

e. 部分平面磨製玉材 16 点。切割や管錐の痕跡が無く、平面に細密な研磨痕跡が認められる。

3、工具

a. 線彫工具関連遺物は 261 点ある。素材には燧石(124 点)、黒曜石(127 点)、石英(8 点)、水晶(2 点)があり、これらは石核(120 点)、石片(129 点)、彫刻器(燧石 10 点、黒曜石 12 点)に分類される。彫刻器は、長さ、幅ともに 3 cm以内の小型石器である。器表面には、打撃による再加工痕跡が見られる。刃部は鋭利、弧状を成す。薄片切割工具は 5 点ある。4 点は砂岩質で、他の 1 点は鉄分を含んだ比較的大型品。刃部は二種類ある。1 つは、扁平な薄片切割工具で

3点ある。黄褐色の砂岩製のもの。刃部は平滑で、残存長 5.9 cm、厚さ 0.5 cm。灰褐色の砂岩製のもの。刃部には横向きの擦痕がある。残存長 4.9 cm、厚さ 0.5 cmある。1つは、三角形を成す切割工具である。刃部が 52° と 45° のものが出土している。玉材の切割痕跡に 52° の角度と合致するものがある。

b. 砥石は 37 点ある。すべてが砂岩製である。砂粒には粗、中、細、極細の四種がある。また、研磨面の形状から四分類できる。①平面研磨砥石 19 点（粗砥 13 点、中砥 3 点、細砥 1 点、極細砥 2 点）。②凸弧面研磨砥石 6 点（粗砥 5 点、中砥 1 点）。いわゆる棒状砥石で、玉器の内孔研磨用であろう。③凹弧面研磨砥石 2 点（粗砥 1 点、細砥 1 点）。表面に凹溝を有するもの。いわゆる玉砥石や筋砥石と呼ばれるものに相当する（日本のそれは数本の溝が一般的だが、本遺跡では 1 本）。④棒錐形研磨砥石 2 点（先端が円錐状で尖部が鈍角を成す。孔底などの研磨用）。

c. 解玉砂。粗細の砂岩の塊がある。解玉砂すなわち“媒材”資料を指す。

結語

- 1、[文化性質と年代] 太湖地域の良渚文化の影響を受けている。土器は良渚文化晩期の特徴を示す。
- 2、[第四文化層の遺物の性質] 玉材と小型石器、砂岩類の工具などを出土しており、攻玉工房が確認された。
- 3、[玉器加工の初歩的探求] 石器加工技術から玉器加工の専用の技術が顕著化するとともに複雑化している。線切割と薄片切割の結合技法が見られ、玉器内部を専門に研磨する棒状砥石が出現している。良渚文化の玉器加工の成熟段階を示している。

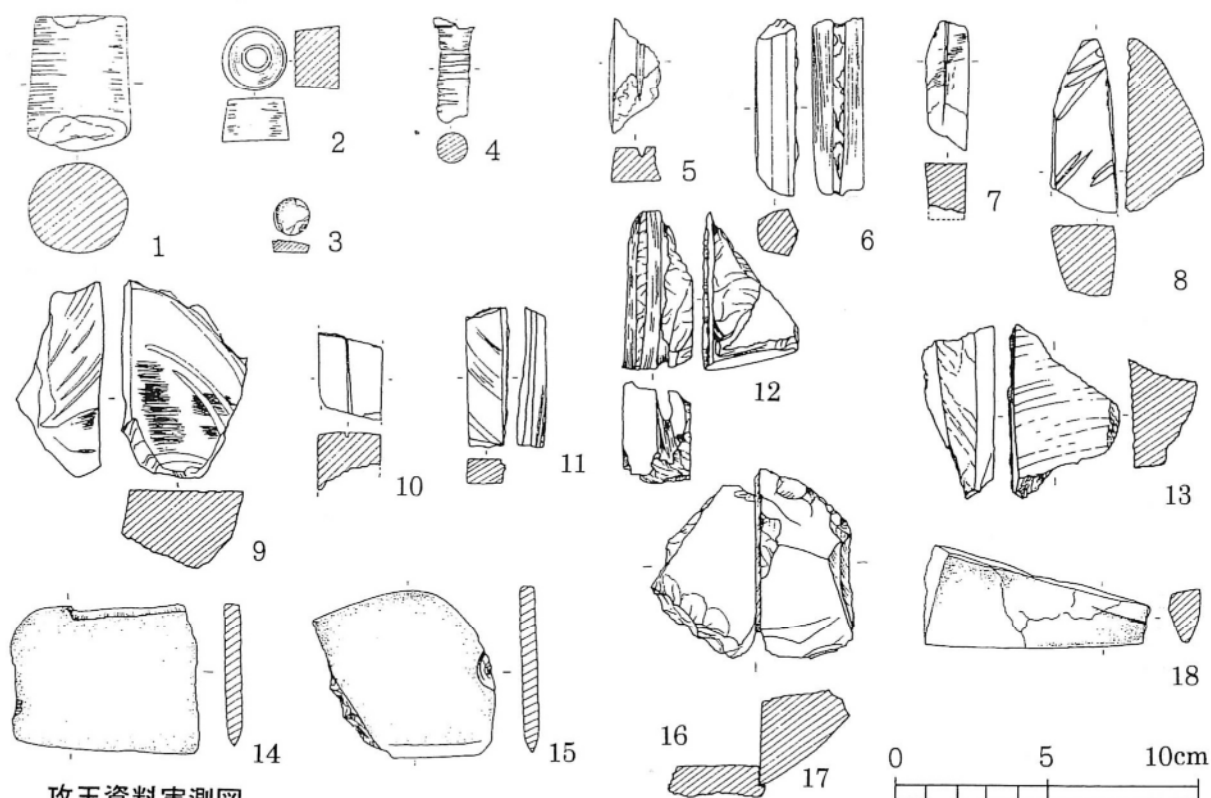
[紹介者解題]

本報告は、「簡報」とあるように概報である。土器から「良渚文化晩期」に比定されている。絶対年代は記載されていないが既知の年代観からすると B.C2500 年頃に営まれたものであろう。良渚文化は精緻な玉器製作で知られているが、本遺跡では良好な攻玉資料が得られた。

中でも、薄片切割工具による「擦切り技法」の存在は、日本列島での磨製石斧の擦切り技法を想起させる。また、報告では玉材に残された「薄片切割痕玉材」と「薄片切割工具」を、「線切割痕玉材」と「小型石器」との関係を示唆するところとなっている。「線切割痕玉材」は、深淺不統一な弧状凹線が観察され、本文でも「柔軟性をもった工具で媒材を用いて切割された」と記述されている。ただし、工具の解説ではそれに小型石器が関与している記述となっている。

ここでは、原文の「線切割痕」をそのまま記したが、「線」には、「糸」や「針金」の意味がある。それを意識して理解した方が実態に近い。一般的には、線切割痕は「動物の強靱な筋や動物の皮などを編んだ縄を弓形の糸鋸とし、媒材を用い水をかけながら玉材を挽き切る」（林華東ほか『20 世紀中国考古十大発見』浙江古籍出版社 2001 年）ことで生ずるとされている。

この手法について、紹介者は格別関心をもっている。かつて「玦状耳飾」（『縄文文化の研究 7』雄山閣 1983 年）の製作工程を考察した折、第 6 工程（孔壁のくの字状突出を切除する）で、「工具は柔軟性をもつ材質の可能性」があることを指摘した。実は、第 2 工程（切截）でも「線切割痕」と同様の痕跡が確認できるのである。私は、それ以降中国での類似技法に留意してきた。中国・丁沙地遺跡は、小型石器を「線切割痕玉材」の工具として示唆するが、図示された小型石器の使用痕などの検討が必要であらう。本遺跡での攻玉の実態は、日本での攻玉を知る上でも参考となると多い。本報告の刊行が楽しみである。



攻玉資料実測図

1. 琮・鐲類の錐芯、2～3. 璧・鉞類の錐芯、4. 柱形器類の錐芯、5～7. 薄片切割痕玉材、8～10. 線切割痕玉材、11～13. 薄片切割技法＋線切割痕玉材、14～15. 扁平薄片切割工具、16. 玉材、17・18. 三角形切割工具

寄贈資料 (貴重な資料を1件寄贈いただきました。)

亀田正夫氏寄贈資料一覧

遺跡名	分類	種 別	時代	点数	遺跡名	分類	種 別	時代	点数
北代	土器	縄文土器	縄文前 ～晩期	228	北代	石器	石核・原石等	縄文	30
		土師器・須恵器	奈良・平安	25			石棒	縄文	1
	土製品	有孔球状土製品等	縄文晩期	2			パステル形石製品	不明	6
		土偶	縄文	5		自然遺物	骨	不明	1
		土玉	縄文	1		製鉄遺物	羽口	奈良・平安	1
		土器片円板等	縄文	23			鉄滓	奈良・平安	2
		土錘	奈良・平安	2		小計			1119
	石器	磨製石斧・磨製石器	縄文	74	御坊山	石器	ナイフ形石器	旧石器	2
		打製石斧	縄文	7			剥片	旧石器 ～縄文	14
		凹み石・敲石	縄文	7			玦状耳飾	縄文前期	1
		石錘	縄文	15		小計			17
		石鏃・石槍	縄文	200	北押川・墓ノ段	石器	剥片	旧石器	2
		石錐・石匙	縄文	37			砥石	不明	1
		玉・玉未成品・垂飾品	縄文	7		小計			3
		玉原石等	縄文	16	八町	土器	縄文土器	縄文	2
		剥片	縄文	429	合 計				1151